中国・台湾訪問記
再来一杯茶《7》
（お茶をもう一杯下さい）

※日本語化した中国語

中国から入ってきた古語は日本語になじんでしまって、漢語なのか和語なのか分かり難い場合がある。比較的新しく輸入された中国語も日本語に溶け込みつつあるが新しい分、現在中国語に近く漢語と分かる。その代表例を紹介しよう。

1. 湯タンポ

老婆や婆は中国語では女房のことで、お婆さんではない。湯タンポは漢字で『湯湯婆』と書き、最初の『湯』は日本語で発音するが、続く『湯婆』は中国語で"タンポ"と発音する。したがって湯タンポは日中併用の単語なのだ。

中国語の『湯（タン）』は物が温かい意味。『婆（ポ）』は女房のことで、『湯婆（タンポ）』は女房の温（ぬく）みの意味なのだ。

2. ロートル

70代の日本人が自身を指してロートルと話したのを耳にしたことがあり、中国語発祥の言葉であるのを思い出した。ロートルは中国語では『老頭児』と書き、"ラオ・トーアル"と発音する。意味は老人である。

3. 麻婆豆腐

ラー油と胡椒・挽肉などで辛く煮詰めた豆腐の四川料理であるが、正式名称は『陳麻婆豆腐（チン・マーポー・ドウフ）』で"陳さんの麻女房の豆腐"が意味である。麻奥さんが考案してヒットした四川の豆腐料理であることから、この料理の名前が付いたそうだ。

4. パンダは熊猫か猫熊か？

パンダが中国から日本に贈られたときに、中国語でパンダは熊猫と紹介されていたのに対して「パンダは猫ではないのだから猫熊は分かるが、熊猫はおかしい？」と新聞のコラムに書かれていた。鋭い指摘であるが、実際の中国語はどうなのか？実は「熊猫」でも「猫熊」でも正しい。なぜこのようになったかをコラムを書いた記者は知らなかったようだ。

パンダを中国でも四川省以外で知られていなかった時に、省外からパンダ取材に来た記者がパンダ舎の横文字で書かれた名札の「熊猫」を見てそのまま記事にして熊猫が一般に知られた。ところが「熊猫」と読むのは間違いで、昔の書き方で右から左に読む「猫熊」が元々の名前だったのである。後にこの記者の間違いが知れて今では、「熊猫」も「猫熊」も正しいことになった。

猫熊（パンダ）

5. ちんぷんかんぷん

国語辞書によると当て字で『珍粉漢粉』と書く。語源も所説あるようだ。しかし私は、中国語が語源ではないかと思っている。中国語で全く分からない事を『聞いても見ても分からない』と言い、漢字では『聴不看不懂』と書く。発音は『チン・ブー・カン・ブー・ドン』で、ちんぷんかんぷんとほぼ同じだ。

6. 画龍点睛

この言葉は"がりゅうてんせい"と読みそうだが、正しくは"がりょうてんせい"である。龍がなぜ"りゅう"でなく"りょう"なのかは、中国から伝わって来た地域と時代よるのではないかと思われる。この成語は梁の時代で、首都は江南にあった。江南は呉音の地域で、"りょう"と発音されたのだろう。漢字の意味であるが、『画』は動詞で"描く"の意味、『点睛』は　"目"である。したがって画龍点睛の直訳は、龍の目を描くである。また『睛』は『晴』と間違いやすいが、日偏ではなく、目偏である。画龍点睛は画の上手な宮廷画家が、寺の壁に龍を描いた時に、目を最後に描いたら龍が壁から出て天に登った故事からできた言葉だそうだ。そこからある物を加えることで、または加えられたことで画や文章・言葉が活き活きすることを指すようになった。

※桂林の月亮山に登る

中国の桂林に旅行した時に、陽朔県の南方数kmの所に月亮山があり登った。頂上付近に丸い穴が開いていて、月が出ているようだ。標高差は200m位で、高すぎず低すぎずであったが、暑い日で結構しんどかった山登りだった。登る前の麓に缶ジュースやペットボトルなどの飲料水をバックにいっぱい詰め込んだおばさん売りがいて、中国語で「飲み物はいらんかね～?」と言われた。私は、「不用（ブーヨン／意：要らない）」と答えながら歩き始めた。するとそのおばさんは、重い売り物を抱えながら一緒に歩き始めた。山の上方で売るのかと思った私は、そのおばさんととりとめもない話をしながら一緒に歩いた。途中何か所かで休憩した時に、そのおばさんはまた「飲み物を買わない？」と言った。私はまた「還不用（まだ要らない）」と答えた。そのおばさんは、汗で真っ赤な顔をして、とうとう頂上まで付いてきてまた「飲み物を買わない？」と言った。頂上にはそのおばさん以外の売子もいて、彼女たちを見てやっと気が付いた。山登りに付いて来たおばさんは、私に売るために一緒にきつい山を一生懸命に登ったのだ。何か申し訳ない気持ちでジュースを2本買った。しかし売りたいがために、まつわりつかれるのはいい気分ではない山登りだった。

月亮山

月亮山の近くに少数民族が住む深い山がある。その山の頂上付近は、小さな無数の棚田に開墾されていた。千年以上前から棚田で稲作をしている民族だとか。頂上までの中腹で、バスを降りて休憩した。そこには錫の飾り物を付けた少女が、有料で写真を撮らせてくれた。頭には立派な錫の冠を、首には錫のネックレス、腕には錫のブレスレッドを付けていた。上海の西方の蘇州の近くに無錫(むしゃく)があるが、名前の由来は元々錫の産地だったが、掘り尽くされ錫が無くなったので無錫と言う地名になったのを思い出した。錫だらけのアクセサリーを好む人が多いから錫が無くなってしまったのだろう。私はそこで立派な錫のブレスレットを購入した。

少数民族の少女

なお昼食は頂上のレストランで名物の竹筒ご飯（竹筒に米を入れて火にくべて炊いたご飯）に、薄味の中国ビールを「再来一杯啤酒（ビールをもう一杯ください）」と言いながら錫好きの少数民族のご馳走を頂いた。

※七歩詩

以前に横山光輝の漫画三国志全60巻を読んだことがある。その中で、魏の皇帝曹丕が弟の曹植に「七歩で兄弟について詩を作れ、出来なければ死罪だ！」と無理難題を突き付けた。しかし曹植は見事に七歩で詩を作って、その詩を聞いた官僚は涙を流した場面があった。その漫画を見た時は何故涙を流す程の詩か、また五歩や八歩ではなく何故七歩なのか疑問であった。

その十数年後に中国語を勉強して、七歩詩を中国語で詠んで「ハッ！」と気が付いた。この詩は六行詩で、題を含めて一歩一行、七歩目で完成する。そのため五歩や八歩ではだめなのだ。また中国語独特の舌を巻き上げて発音する巻舌音（けんぜつおん）が散りばめられていて、意味に加えて発音が中国人の琴線に触れたため、詩を聞いた官僚が涙したのだと気が付いた。下に七歩詩の翻訳を示す。

七　歩　詩　　作　曹植　＜訳：王 子雲＞

羹（あつもの）を作るため、豆を煮てこして汁にする。豆ガラは釜の下で燃え、豆は釜の中にあって泣く。もとは同根から生じたのに、どうしてそんなに競って相争うのか？

私の高校時代に古典の授業があった。そこには漢詩が幾つかあって何となく興味を持った。50代になってから中国語を勉強して、再び漢詩に触れる機会があり「オヤ！」と思った。漢詩は高校で学んだ詩と、中国とで同じであるのが当然と思い込んでいたら、幾つかの詩で違っているのを発見した。日本に伝わる詩が原作で、中国では何故か変わってしまった詩がある。その一つを紹介する。王維の紅豆は、日中で意味も逆で珍しい詩である。なおこの詩を理解するには、その時代の背景を知る必要がある。詩の中の南国とは、唐の首都長安（現：西安）から見て南方の現在の広東地方のことで、広東の風習では思いを寄せた女性に紅豆を贈り、それを受け取ると結婚できるプロポーズの品だったそうだ。

紅　　豆　　作　王維　＜訳：王 子雲＞

＜日本＞		・	＜中国＞	
紅豆生南国	春来発幾枝	・	紅豆生南国	春来発幾枝
勧君不採擷	此物最相思	・	願君多採擷	此物最相思

【意味】＜日本＞

紅豆は南国で生（は）えて、春が来ると枝を幾つか出す。これは愛し合っているカップルにとって最も大切な物だから、彼女がいない君には採取を勧めない。

【意味】＜中国＞

紅豆は南国で生えて、春が来ると枝を幾つか出す。これは愛し合っているカップルにとって最も大切な物だから、君は沢山採取するのを願う。

※タイガー・シャーク（虎鮫）飛行隊

ツアー会社を介さなかったために、自由気ままに妻と台北旅行をした。妻は植物が好きなので台北の植物園に行った。日本統治時代に、植物の研究を兼ねて造られたのだとか。敷地は広大で主な所を回るだけで疲れてしまったが、見ごたえある園であった。そこに初めて見た高粱があった。「ほ～！これが高粱酒の原料か」と感じ入った。

植物園（台北）

あまりにも広い敷地だったので、少し休みを取ってから隣の敷地にある歴史博物館を見学した。しかし植物園で疲れてしまったので、じっくり見学する余裕がなかった。

高 粱

歴史博物館を出て繁華街の西門町へ行くことにした。西門町は日本の原宿みたいな若者の繁華街である。MRT(電車)で行くこともできたが、4～500m位先なので歩いて行くことにした。数100m歩いて大通りに出て右側数100m先に西門町が見えた。道を間違えず一安心。更に数10m行ったら右側に国軍歴史文物館があった。「はて、日本人が入れるのかな？」と思いながら、入口をのぞき込んでいたら受付嬢が中国語で「どうぞ入って！」と声を掛けられ、そのまま入った。

歴史博物館（台北）

中の展示物の説明は中国語と英語のみで日本語はなかった。中国語で分かる所と英語で分かる所を拾い読みして何とか理解した。展示物の中で虎鮫飛行機があり興味を持った。飛行機の頭部に鮫の口を、胴体の後方には虎の模様が描かれて、ちょっと滑稽な感じだ。なお「虎鮫」の英語表記は、「タイガー・シャーク」になっていた。

虎鮫飛行機【Web】

日中戦争当時アメリカが飛行機の提供と、操縦技術を伝えるためパイロットを国民党政府に派遣したとのこと。これはタイガー・シャーク（虎鮫）隊と命名され、一時アメリカ人と中国人で共同生活をしたと、ガイド板に共同生活の写真と共に書かれていた。この作戦で中国軍が空での反撃ができるようになったようだ。

国軍歴史文物館を見学した後、西門町をさぁーと見てからホテルに帰って、ビールを飲みながら歩いた疲れを癒した。もちろん「再来一杯啤酒（もう一杯ビールをください）」と言ってお代わりしたのは勿論である。

◆ 記事　　**嵯峨 良平**（昭和43年電気科卒）

四季の語らい、くつろぎのひととき。

BANQUET
宴会・会議
CCOMMODATION
宿　泊
RESTAURANT
レストラン

アルカディア市ヶ谷
私学会館
https://www.arcadia-jp.org
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25
TEL03-3261-9921(代表)

株式会社 汎建築設計事務所
代表取締役　鈴木誠一（昭和38年建築科卒）
一級建築士
コスト管理士
秋田市保戸野すわ町14-23
TEL 018-862-3449
FAX 018-862-3289
E-mail : han_0416@cna.ne.jp
URL : http://www.cna.ne.jp/~han_0416/

D-KUWAHARA
高圧受変電設備　点検・測定・保守
自動制御設備　設計・施工
電気設備工事
各種イベント仮設電源工事
有限会社 桑原電設
〒011-0945 秋田市土崎港西3丁目5-15
TEL (018)857-0284　FAX (018)857-3983
携帯 090-8925-0889
E-mail：kuwaharadensetu@d-kuwahara.co.jp
http:www.d-kuwahara.co.jp
代表取締役　桑原 栄治（昭和50年電気科卒）